



Title	デザイン・サーヴェイ ミクロネシア・ポナペ島の生活と衣服
Author(s)	片山, 陽次郎
Citation	デザイン理論. 1977, 16, p. 64-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53628
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デザイン・サーヴェイ

ミクロネシア・ポナペ島の生活と衣服

片 山 陽 次 郎

1. 序

昭和50年8月2日より25日まで、千葉大学工学部のグループに参加し、ミクロネシア・ポナペ島において、生活とデザインに関する野外踏査（デザイン・サーヴェイ）を行った。

デザイン・サーヴェイは「生活の仕方」「生活様式」を、生活用具を中心に観察・記録して、その地域社会の生活体系を総合的に把握してゆくことを通じて、将来の生活用具や生活空間の計画・設計に対する実践的指針を導き出し、ひいては、生活の計画・設計に対するデザインの在り方についても考えてゆこうとするものである。

本報告はポナペの人々の日常的・非日常的生活の展開されるなかでの衣服とのか、わりあいについて、観察したものをまとめたものである。

調査団は総勢12名で、これが2～3名の小グループを組み、ポナペの5つの村に分散し、島の人々と共に生活体験を重ねるなかで、観察し、資料収集を行った。筆者らが生活をしたのはコロニアという町の裏側になる比較的開けていないマタラニーム村のアニパスというコウシャップ(字)のチーフの家、アニパス家である。したがって、これから報告するものは、アニパス家を中心とした、マタラニーム村の人々の生活である。なお、5つの村を通じて、生活慣習がそ

の本質において大きく異なる点は少ないことから、本報告の内容はほぼそのまゝ、ポナペ島全体の衣生活の特性に通ずるものといえる。

なお、本報告は関西意匠学会第17回大会（昭和50年11月）においての発表、および、衣生活研究2(9・10)¹⁾・3(3・4)²⁾の報告を基にして手を加えたものである。

2. ポナペ島の概況

ミクロネシア・東カロリン諸島中のポナペ島は、スペイン・ドイツ領時代を経て、第1次大戦後、日本の委任統治ののち、第2次大戦後、米国の信託統治領として現在に至っている。

位置³⁻⁵⁾は北緯7°，東経158°にあり，周囲を珊瑚礁にかこまれた，ほぼ円形の島(図1)で，直径17km，島周120km，面積375km²，およそわが国の淡

路島の $\frac{1}{2}$ の大きさの，ミ

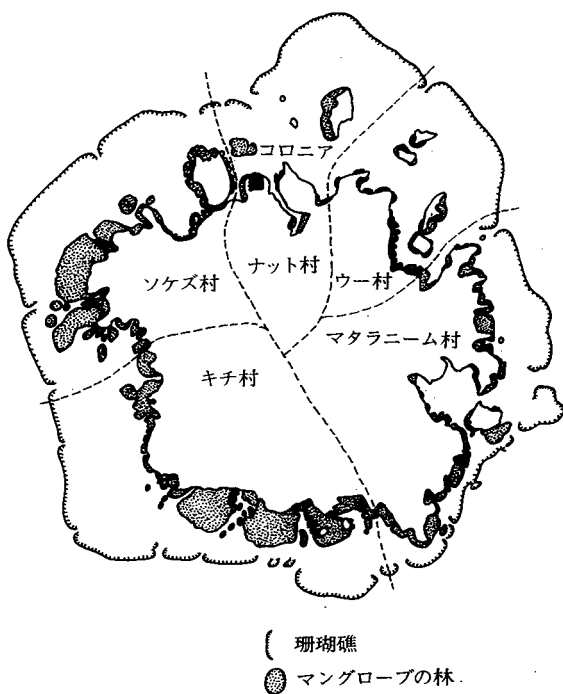


図1 ポナペ島略図

クロネシアでも大きい島の1つである。近い小島まで100海里，島らしい島で最も近いクサイ島まで310海里もあり，まさに，南海の孤島という名にふさわしい。

火山作用と珊瑚の造礁作用とがポナペ島の地形を造りあげたため^{3,5)}，島の中

央部の溶岩台地である約750 mの山陵部を基点に、全体として周囲の海岸線ま
ゆるやかな傾斜がみられ、海岸線のほとんどがマングローブの林におゝわれて
いる。海岸から平均4 kmの距離で珊瑚礁が島を囲み、静かな海面の礁湖は木製
カヌーによる漁労の場として活用されている。

気候^{4,6)}は熱帯海洋性気候で、平均気温26～28℃、湿度79～71%、年間を通
じて高温多雨多湿であるが、昼間の日射しの厳しさと、夜の肌寒さ、昼夜の温
度差はかなり大きい。雨期が7月から9月にかけてあり、今回の踏査はその雨
期にあたった。雨期以外でも1日に1・2度は20分程滝のようなスコールに見
舞われ、降雨時には道路は川のように水が流れ、河川はたえず赤茶けた水を海
岸の珊瑚礁に押し込めている。

人口^{4,6)}は約15,000人でミクロネシア族^{5,6)}と称される人種であるが、一見、
欧米人、日本人を含む東南アジア系の混血と思われる人々が見うけられる。こ
の人々が1町5ヶ村（コロニア町、ナット村、ウー村、ソケズ村、キチ村、マ
タラニーム村）に住んでいる。

ポナペ島は各村の最高位の人ナンマルキが絶対権⁷⁾をもち、行政組織とは別
に各村々が小国家的性格をなしている。したがって、各村々での生活の外面的
様相は複雑多岐である。また、世代による考え方の相違についても、40才代を
境としてポナペ語と日本語を話す世代と、ポナペ語と英語の世代に大別され、
この言葉の差が世代の差に輪をかけて増幅されているように思える。

ミクロネシアの財政^{4,6)}は収入の75～80%が米国政府の援助金で、域内徴税
その他の収入は約6%である。目新しい産業もなく、現在までのところ徴税源
の拡大は期待できない状況で、ポナペの産業⁴⁾ではわずかにコブラ油があげら
れる程度である。したがって貿易収支のアンバランスが目立ち、輸入が輸出の
10倍となる程である。島民の食料である米・小麦粉などが米国から輸入され、
日本から魚缶詰・即席ラーメン、調味料などから自動車・繊維製品・雑貨の輸
入が増加し、コロニアのマーケットにはこれらの商品が満ちあふれている。島

民，特に村の人々の生計は自給自足を主にして，専業はほとんどなく，現金収入はアルバイト的収入が主である。

3. 外来様式の衣服

伝統的な衣服⁸⁾は男性はヤシの葉で，女性はパンの木の樹皮を加工したものをまとったと伝えられるが，実態は島の人々にも不明なところが多い。

遠くスペインによる統治時代よりキリスト教の布教が盛んで，現在はほとんど全員がクリスチャンである。毎週日曜日の教会の礼拝は，島の人々のレクリエーションの場ともなり，コミュニケーションの場としても重要な役割を果たしている。

外来文化の影響⁵⁾はキリスト教の布教とともに，他の用具に先がけて衣類から普及したといわれて

いる。

現在の男女の衣服類
の概略は表1のとおり

男 性	女 性
シェーツ (シャツ) 表着	リコッリー (ワンピース) 表着
ラウシス (ズボン) 表着	ウローシュ (スカート) 表着・下着
リコーティ (コシマキ) 表着	リコーティ (コシマキ) 表着・下着
サルマタ (パンツ) 下着	サルマタ (パンティ) 下着

表1 衣服の種類

であるが，素材はほと

んどが木綿の織物である。

毎週日曜日の教会の礼拝には一番の晴着（写真1）を着る。村のプロテスタントの教会の例では，司祭者も村の人々になるのだが，家から教会に出かける際は，ほぼ普段着と同じ状態で，シャツに



写真1 教会の礼拝時の晴着

ズボンとゴム草履というスタイルである。そして教会の控室で，長袖のワイシャ

ツにネクタイをつけ、背広を着て靴下を履き、革靴を履いて礼拝にのぞむ。赤道に近い高温多湿地で、草木が生い茂る山道のように細く、起伏のある道で雨にぬれたり、天気の良い日は汗まみれになり、背広姿ではとても歩けない。一般の男性も新しい運動靴や革靴姿もあり、ワイシャツ姿の人もあり見られるが、なかにはネクタイを締めている人もいる。下着にランニングシャツを着ている人もいるが、多くは、新しい色柄の開衿シャツとズボン姿である。

女性の服装はワンピース姿であるが、下着にペティコートの役割りでウローシュを着るのが一般的である。ウローシュの裾に飾りがあり、重ね着の状態ウローシュの裾を出すようにワンピースを着る(petticoat dress)。上半身は普段ほとんど下着をつけないが、教会の正装には下着にブラジャーをつけている若い人も見られる。また、若い人の中には普段にブラジャーをつけている人も見られるが、この場合、表着として、ブラジャーとウローシュの組合せで着装されている。教会の正装では白色のワンピースを着ている人もかなり見られるが、一般的には原色に近いプリントの花柄のワンピースを老若問わず着ている。型はギャザースカートのワンピースで形がほとんど一定しており、配色や模様の変化が唯一のバリエーションといえる。

下着では男女ともサルマタをはいている。名称からわかるように日本の統治時代から普及しているが、中年以上の女性は普段はいていない人もいようである。

教会の正装で男女の共通点は、礼拝のつど、常に新しい衣服を順々にまとうか、あるいは白無地のワンピースやシャツを着ることである。

教会で着た色柄の衣服は、次にカマティップ(祭)、外出用、家庭着、仕事着と、順次普段着の方に繰り合せて、最後に家の入口の足拭きなどに使用し¹⁾廃棄される。(図2)

イ) 島の人々は常に裸足かゴム草履で外出し、家に入る時はよごれた足を天水で洗い、布ぎれで拭いてから家に入る。

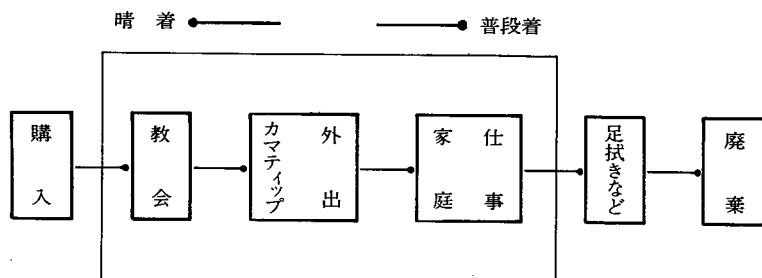


図2 衣服の消費過程

カマティップはボナベの祭の総称で、ヤムイモ（主食の1つ）の収穫祭、人々の歓送迎、婚礼、葬儀、家の新築落成などに開催される。

カマティップはナーシ⁹⁾と呼ばれる集会所兼作業場¹⁰⁾で催される。この晴れの日には人々は仕事を休み、食料を持ちより、同じ火で焼いた食物を同じ空間・時間の中で共に食べ、歌が歌われ、シャカオ（酒）が厳粛なマナーのもとに飲まれる。そして、食料を分配してそれぞれの家に帰るのであるが、ある時は夜を徹し、または数日間続くこともある。

前述のように、教会の礼拝に次いだ晴着がこのカマティップで着られるのだが、しかし、共に食事をし、シャカオを飲むための仕事が分担される。割りあてられた人は晴着とはいえ、仕事がしやすく、汚れを考慮したや、古い衣服を着ている。なお、シャカオを作る人は男性に限られ、その人々は上半身裸で行うことに決められている。

外出着もカマティップと同様の晴着であるが、外出先の距離・目的などによって服装の選び方が異なる。例えば、コロニアの町への外出と、近所のマーケットの買物とでは、コロニアの町¹¹⁾にはより上等の衣服を着て出かける。

ロ) ナーシはカマティップを催す建物で、したがって、カマティップの様式に沿った空間構成がなされている。しかし、普段は昼間、家の作業空間であり、雨が降れば子供の遊び場ともなる。そして夜になれば近隣の人々が集り、昔からのボナベの酒、シャカオをマナーに基いて飲みながらいこう団らんのみである。なお、電灯の設備はコロニアの町以外はなく、夜の催しはランプの下で行われる。

ハ) コロニアの町はわれわれの住んだアニバス家から徒歩とボートを利用して約2時間必要とし、近所のマーケットでも徒歩で片道30分かかる。ボートは外米の形式のもので輸入された船外機をつけており、近所の親類で共有している。陸上の道路網はコロニア町とその周辺のみで、他は局部的な自動車道のみである。したがって、マタラニム村から他の地域への交通機関のほとんどが、ボートに依存している。

以上、晴着の共通性は男性はシャツとズボン、女性は下着にウローシュをつけ、そして必ずワンピース姿である。

普段着は一般に晴着の古いものが着られ、着装の組み合わせは多様に変化する。女性の仕事でイモの採取や、マングローブの林での薪とりは重労働で、大変汚れる作業であるが、晴着と同じ型のワンピースを着て行く時も多い(写真2)。仕事やくつろぎにワンピースを着る場合、下着はウローシュの代りにリコーティ(腰まき)を組み合わせる場合もある。コブラ焼き¹⁰⁾

(焼いたあとと共同の精製所でコブラ油となる)の作業や川での洗濯、屋内や敷地内では上半身裸でウローシュだけの場合もある(写真3・4)。また、



写真2 マングローブの林で、家族総出で薪採り



写真3 ウローシュ姿で川で洗濯

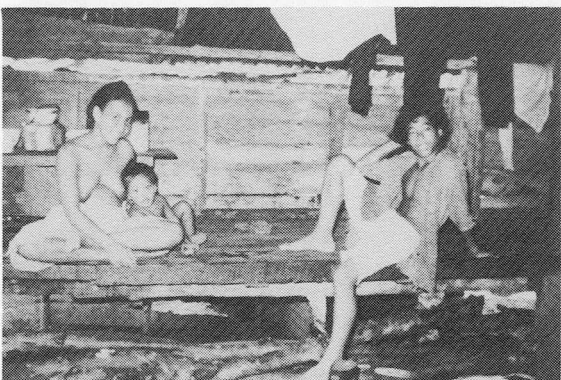


写真4 ナーシ(図4)の中でくつろぐ家族



写真5 リコーティとウローシュの重ね着

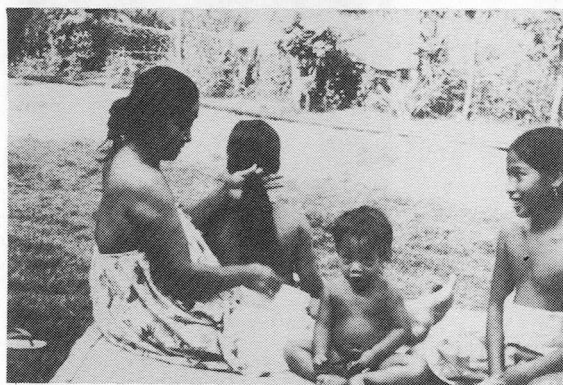


写真6 ウローシュをバストからつけた重ね着
—庭先で家族の団らん—

上半身を男もののシャツをまとっている場合もある。そして2枚のウローシュを組合わせて1枚をウエストでとめ、他をバストでとめる重ね着のスタイルもあり、そのいずれか一方をリコーティにする着方もある（写真5・6）。

男性の普段着もシャツとズボンの組合わせが一般的であるが、上半身裸での作業やくつろぎの情景も見られるし、ズボンの代りにリコーティ（腰まき）や、奥さんや娘さんのウローシュを借りて着ている風景も見られる（写真7）。子供が親

のシャツを着て、ダブダブさせながら一生懸命仕事に励んでいる情景もめずらしくない。

アニバス家には1才になる孫の男の子がいるが、家の敷地内では生れたままの全裸で遊んでいる。おしめによる肌のたぐれの心配もなく実に健康的

であり、また、洗濯の手間も省ける。

4. 伝統的様式の衣服

カマティップ⁹⁾は村の最高位の人、ナンマルキを中心に催されるが、ヤムイ

モノの収穫祭が村全体でナンマルキのナーシにおいて盛大に催され、引き続き村の38のコウシャップ(字)のチーフのナーシで催され、順次それぞれのコウシャップのカマティップにもナンマルキが出席する。その時のナン



写真7 漁捕りで奥さんのウローシュを着ている男性

マルキだけが、伝統的装束であるヤシの葉の腰みのに細かい貝殻のビーズをあしらった帯、そして、貝で飾られた首飾りと頭飾り(マラマル)がつけられる。

宴がたけなわになると、一般の男性も上着を脱いで上半身裸になり、その膚に女性がヤシ油を塗る。女性は脱衣しないが、襟首や両手にヤシ油が塗られる。ナンマルキも上半身の前後にヤシ油が塗られ、はじめて伝統的正装となるのである。

もう1つの主食、パンの実の収穫時にはコウシャップを代表してチーフがパンの実の餅、リリーをナンマルキに献上す

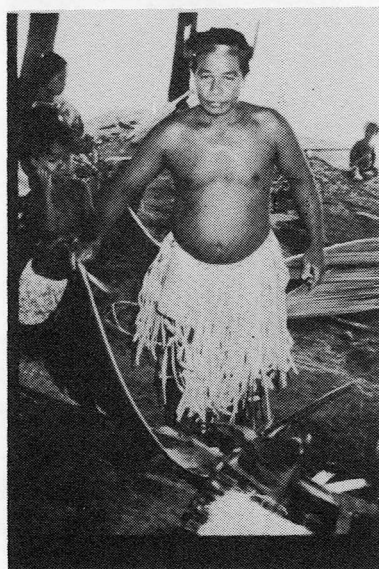


写真8 ナンマルキに献上のためのリリーづくりの装束

る。その餅つきは男の仕事で、装束はヤシの葉の腰みのをつけ、頭にはヤシの葉のマラマルをかぶり、上半身にヤシ油を奥さんに塗ってもらい身仕度ができあがる(写真8)。それから餅つきにかゝるのである。

以上、伝統的行事にかゝる伝統的装束について述べてきたが、衣服に深い

か、わりをもつ、ポナベの身飾りとして、頭飾り、耳飾り、文身について以下に報告する。

マラマル¹¹⁾(頭飾り)は丁度ハワイのレイのように幅広く使われている。前に記述した例以外に、われわれ外来者の歓迎迎のためにも、(写真9)教会の礼拝やカマティッ



写真9 われわれの歓迎に贈られたマラマル

ブの際にも、かぶりたい者はかぶるという方式で比較的自由である。マラマルを作るのは女性の仕事で、身近な材料を用いた手づくりのものである。自然の花や草木、貝殻、余り布の造花や、余り布や毛糸を適当に組合せ、円環に編んだものもある。心のこもった手づくりのものを頭にかぶることは、心あたたまる情報伝達手段ともいえる。

耳飾り¹¹⁾は女性の装身具として米国製のピアス(pierced-ear earring)を、少女から大人まで大半の人がつけている。日本で耳たぶに穴をあけるのは比較的簡単だと聞いているが、ポナベでは縫針に糸をつけて耳たぶに通し、穴がたたまるまで約1週間、針を通し続ける。このような穴のあけ方から想像して、耳飾りそのものは外来のものであるが、伝統的風習が引継がれているものと考えたい。

その他、身飾りの特徴として文身¹¹⁾があげられる。文身を大別すると刺痕文身(入墨)と癍痕文身(肌に傷をつけて模様を残す)があるが、ポナベにはそのいずれも見うけられた。発生は呪術の意味や、個人のステータスを表象したものと推測できるが、入墨は昔、女性の陰部まで彫られたという。性交の刺激や生殖上の信仰とか、わると思われるが、現在はこのような入墨は見うけられない。

ポナペでは入墨をペルペルという。入墨の墨は石焼き^{二)}に使われた薪の炭を水でとき、コブラの皮や樹皮で模様を描き、針を10本程束ねて傷をつける。現在は外来の墨・筆を用いて彫る場合も多くなっている。

癍痕分身には、レケレケとウシメイメイの2種類がある。レケレケは肌にコブラ油を塗ってからナイフやカミソリで直接肌に傷をつけるもので、肌に模様が浮彫されるまで1・2ヶ月の間傷を彫り続ける。模様は短い直線の縦横の配列、斜めに交叉した×印の連続模様などで、半裸の生活の人々の識別に使われたのではないかという説¹¹⁾もある。

ウシメイメイはタバコの火を消えるまで肌に押しつけて焼付けて模様をつくるので、丁度種痘のようなパターンとなる。ミクロネシアでも癍痕分身の風習

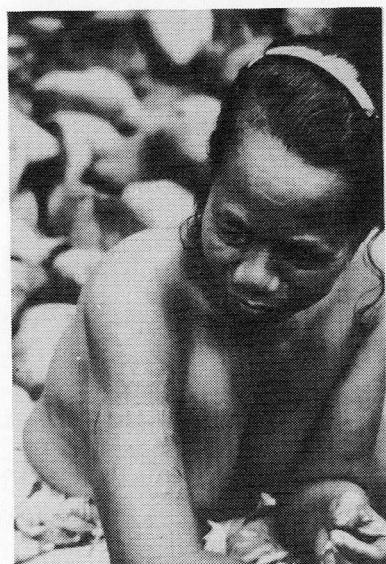


写真10レケレケとウシメイメイー種痘のような白斑ー

は他で多くの例は見られない¹¹⁾がポナペでも癍痕文身は日本の統治時代に禁止されていた。写真10の婦人は第2次大戦中の混乱時代に彫ったものである。

癍痕分身は加工条件によって幾何学的模様であるが、刺痕分身(入墨)は外国からの影響か、現在はほとんど具象的模様である。しかし、伝統的模様は癍痕分身同様の抽象模様¹¹⁾(図3)である。そして、ほとんどの人が何らかの文身を人生の思い出の記録として、愛人にちなんだ模様などを彫っている。したがって発の意味内容はさだかでない。

二) 石焼きはポナペの伝統的食料の調理方法で、ウォヌーンと称する石焼き専用の小屋を各家でもっている。まず、薪を燃やしてその上に丸い石を、はじめは比較的大きな石を積み、段々と小石を積んで半円状にして石を焼く、また、あらかじめ薪を組み、石を積みあげて準備をし、その後点火する方法と手順に2通りある。石が焼けた後、小石を円形状にならし、そこに食物である豚、犬、魚、イモ、パンの実等を並べ、焼けた石をのせ、その上にバナナやイモの葉をおおって蒸焼きにする。

5. 衣服の整理と生活空間

衣服のデザインを考える時、着装時の他に衣服を購入してから廃棄されるまでの間の整理等、全体的か、わりあいを通じての考慮が必要である。¹²⁾そしてこのような視点よりポナベの生活について観察を行った。

衣服の購入より廃棄までの過程を観察するにあたって、まず、生活空間と家族構成について説明する。生活空間の構成⁹⁾はその家の社会的ス

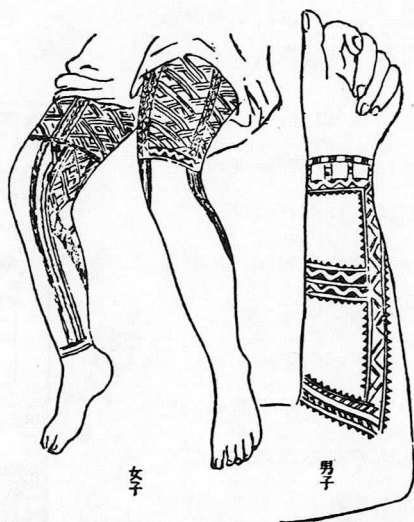


図3 入墨の模様(ミクロネシア民族誌¹¹⁾より)

テータスなどによって異なるが、われわれが身をよせたコウシャップ(字) アニパスのチーフの家の場合、敷地内の家屋は主にナーシ・イマラップ・ウォヌーンがそれぞれ別棟で構成されており、ポナベの一般的形式といえるものである(図4)。家族構成は両親と娘3人、息子2人に長女の婿と1才になる孫の計9人家族である。

衣服の収納・洗濯等の管理的側面と生活空間の関係は図5に示す。

現在、衣服の購入はおよそ男性の衣服は既製品を、女性の場合は布地で購入後、家庭で縫製されている。そして、購入後の新しい衣服は布地や新しいシーツなどの寝具類を含め、また、1・2度袖を通した衣服も晴着に

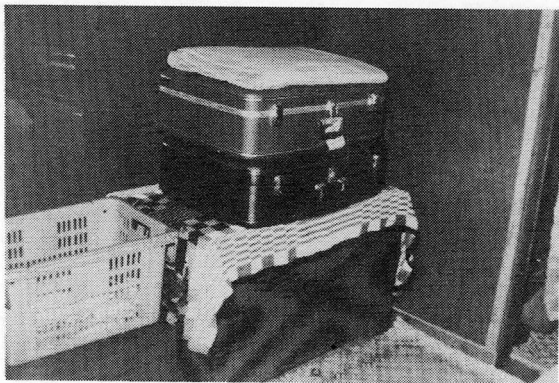


写真11 ナンベレ(寝室)に置かれたコーバ(衣裳箱)

類するものは、イマラップ（主屋）のナンペレ（寝室）に、夫婦単位、子供の場合は男女別にそれぞれのコーバ（木製の衣裳箱）に収納されている（写真11）。

ポナベの気候が前述のように高温多湿多雨地域であるため、一度外出したり、あるいはひと仕事済ますと必ず汗か、雨か、泥で汚れてしまうので、日に何度か衣服を着替え、川

などでの洗濯も頻繁に行う。ポナベの人々の衣服は原色に近い色柄が多く、たちまち色あせた衣服になり、徐々に普段着に移行する。普段着の収納は段ボールの空箱やフロシキ^ホ

ホ）フロシキは日本の風呂敷と同一で、同じように使用している。日本の統治時代より普及したものである。

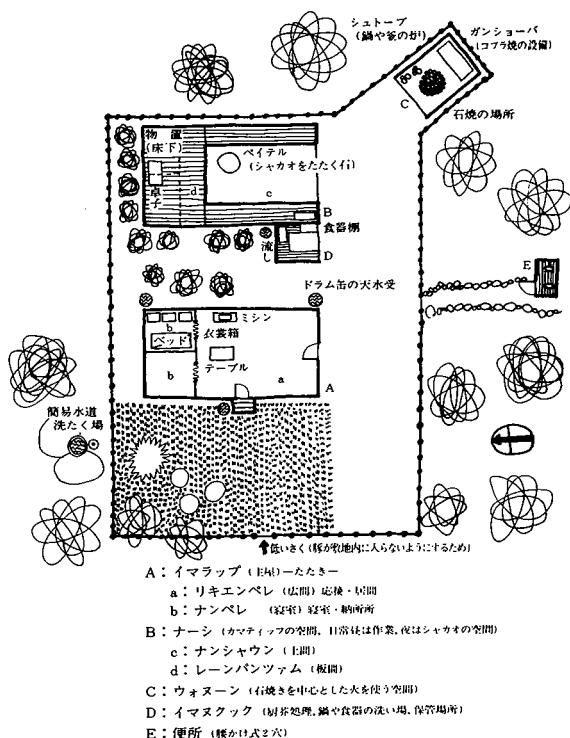


図4 アニパス家の見取図

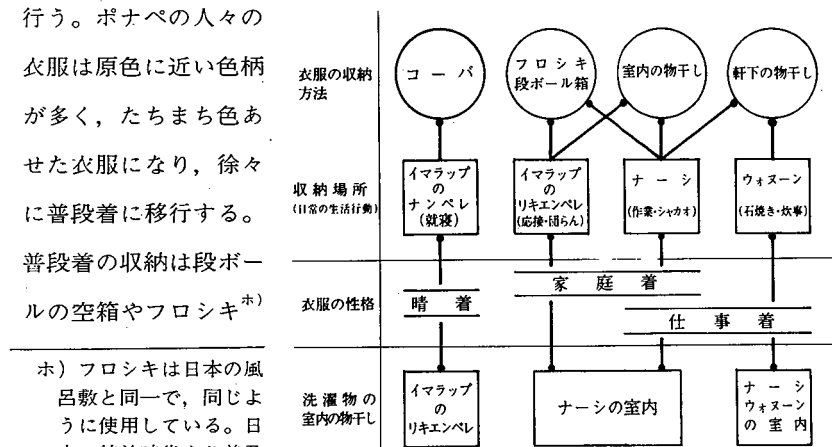


図5 衣服の収納・洗濯と生活空間

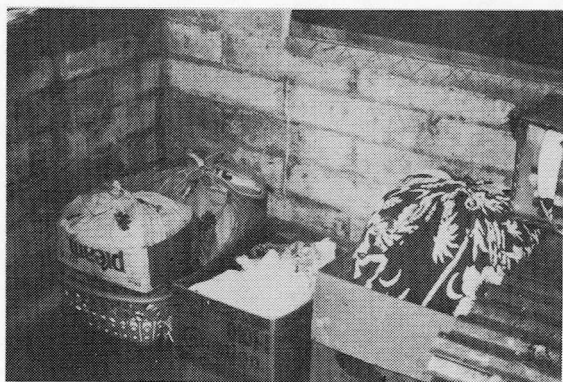


写真12 イマラップ（主屋）の片隅にフシキやダンボール箱に収められた衣類

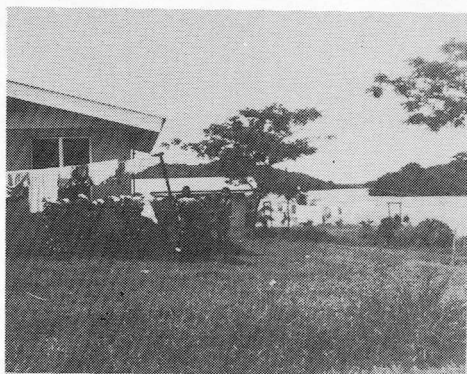


写真13 晴れ間に屋外に干された洗濯物
—自然に人工的アクセントをそえる—

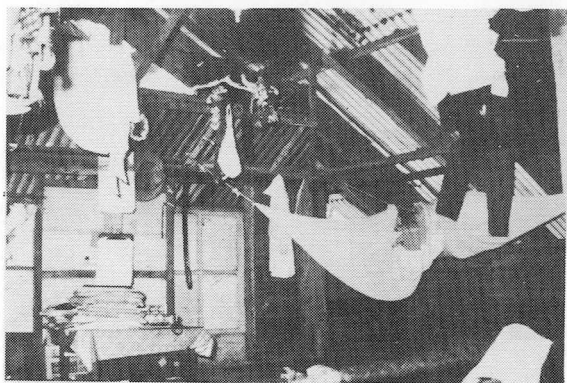


写真14 ナーシの室内に干されている洗濯物

などに収め、イマラップの
リキエンペレ（広間）
やナーシのレーンパンツ
ァム（板間）の片隅（写
真12）や、天井の梁の上、
あるいは梁に吊して保管
されている。洗濯物の干
し場は屋外にも設備（写
真13）されているが、雨
が多く、晴間をみて屋外
に干すため、イマラップ
やナーシの室内（写真14）
に針金などをわたし、室
内に常に洗濯物が干され、
その他、ナーシやウォヌ
ーン（石焼・炊事空間）
の軒下も利用されている。
したがって、日常着てい
る普段着の多くのものは
物干しから乾いた順に着
て、汚れては洗濯し、物
干しに干すという循環が
繰返されるのである。室
内や軒下の物干しは洗濯
物を乾燥させる働きだけ
をもつのではなく、丁度

日本でも衣桁やハンガーに衣服をかけておくように、衣服の保管場所としての機能をもっているのである。そして、イマラップの室内には新しい衣服を、ナーシの室内、軒下、ウォヌーンの軒下と順次着古した衣服が干される。

6. 手芸品にみられるパターンの傾内

自給自足を中心とするボナベ島の生活から彼等がつくりだす生活用具類のパターンの傾向について記述する。

手芸品にはヤシの葉などで編んだ籠類や敷物の他、刺しゅう、レース編み、アップリケ、造花、パッチワークなどの手法でつくられたものは、衣服類の裾の飾りや、ハンドバッグ、寝具類（枕カバー、毛布カバー、ベッドカバー）、マラマル（頭飾り）などに使われている。

衣服類の形態がほとんど同一形態であり、使われている色彩やパターンも原色に近い花柄プリントが多く、自らの手でつくったパターンをアクセントとし

て使っている。そしてつくる楽しみと、それを使う楽しみを共に味わっているのである。

パターンの傾向は具象的花模様と抽象的幾何学模様に大別される。

花は島の中を散策するとハイビスカスやジンジャーなど、絶えることなく咲きほこっているが、女性たちはそれらの花を1つ2つ摘んではかんざしにしたり（写真15）、沢山摘んではマラマルをつくったりしている。そして宴会のテーブルには必ず緑の葉と花が飾られる。このような環境や習慣から、花模様（写真16）が生



写真15 生花を頭に飾る女性、耳飾りはピアスされている。

れてくるのが当然と考
えるのであるが、面白
いことに、この花模様
の中にはボナベ島では
咲いていない花をモチ
ーフにしたものもある。
花模様をアップリケし
たものを見せてもらい、
その花の名を尋ねると、

「名は知らない」と
答えるものがかなり多い、不思議に思っ
ていると、彼女達は服地の花模様を雛形
にしているのである。

ボナベ島の伝統的模様は、平行線・方
形・菱形・三角形・山道・×形のような
抽象的幾何学模様を組み合わせたもので、
動・植物のパターンを用いなかったとい
われている。¹¹⁾ この幾何学模様は前述の文
身の例にも見られ、踊り用に作られたバ
テリ(權) (写真17)にも現存している。

現在、彼女たちの好んで行う手芸のな
かに滞在中の米国婦人より教えられたパッチワークがある。特に、パッチワー
クのベッドカバーは米国西部のキルトに類似している。(写真18・19・20)

また、余り布でつくるマラマル(頭飾り)には造花を円環に幾つもつけた具
象的なものもあるが、余り布を単純に切り、配色効果の美しさのみを意図した
抽象的模様のものもある。



写真16 花模様をアップリケした枕カバー

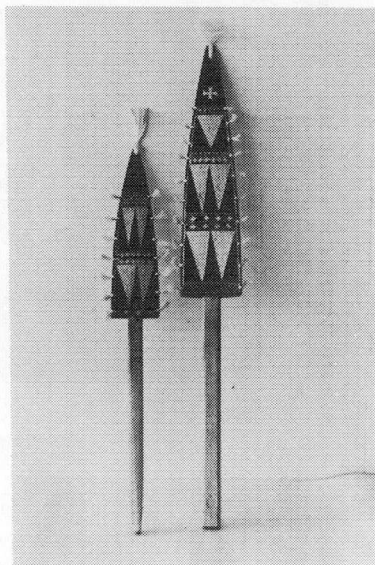


写真17 踊り用バテリ(權)とその模様

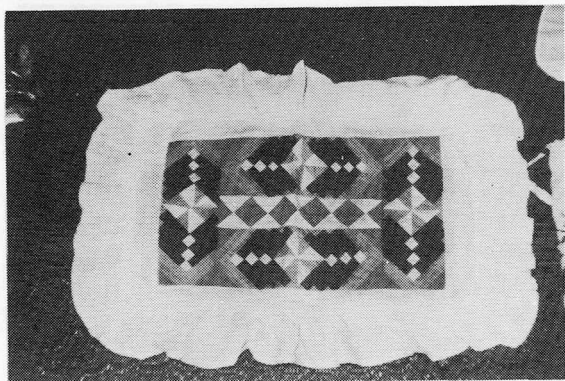


写真18 パッチワークの枕カバー

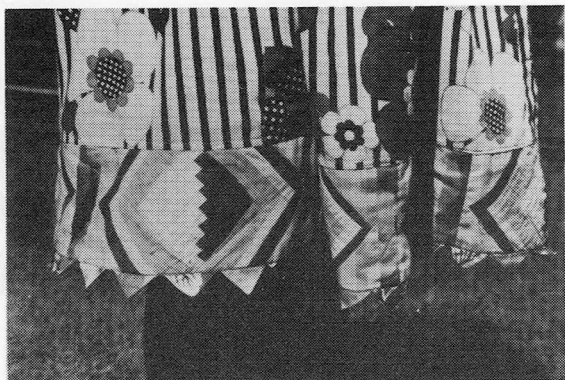


写真19 パッチワークでウローシュの裾飾り

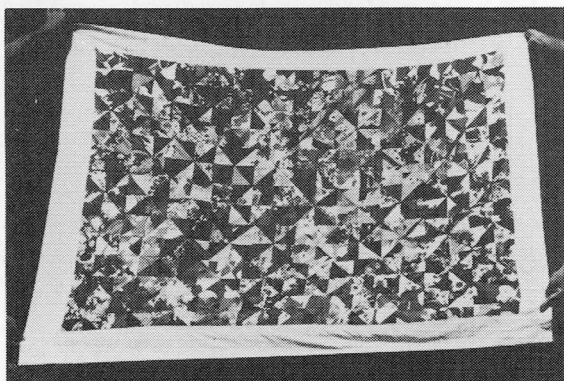


写真20 パッチワークのベッドカバー

そして生活用具の
中のヤシの葉などで
編んだ籠類や敷物等
の編組品の表面形状
は、当然その構成上
抽象的模様となるの
である。(写真21)

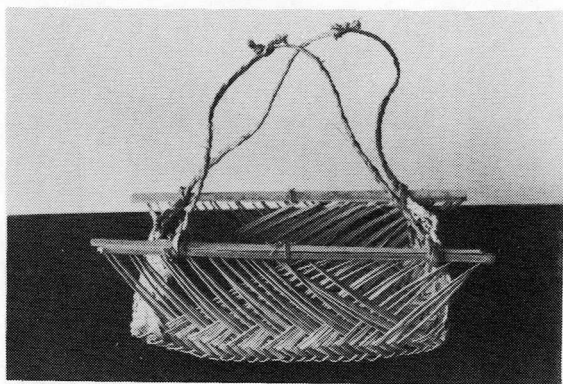


写真21ヤシの葉で編んだコポー(籠)

7. 考 察

以上6節にわたり、ポナペ島の生活と衣服に関して、ながながと記述してきたのは、その実態をなるべく詳細に説明したいがためである。この実態を通して様々な観点より考察することにする。

7-1. 外来文化の吸収と と衣服の様式

3・4節にわたり記述した衣生活の断片のみならず、食生活・住生活においても伝統的なものに代って外来の新しいものが島の人々に普及しつゝある。その中で衣生活における外来文化の吸収は比較的古くからであり、とりわけ普段着においてポナペの伝統的文化に同化され安定した様相を示しているようにうかがえる。

図6は晴着から普段着まで、外来の

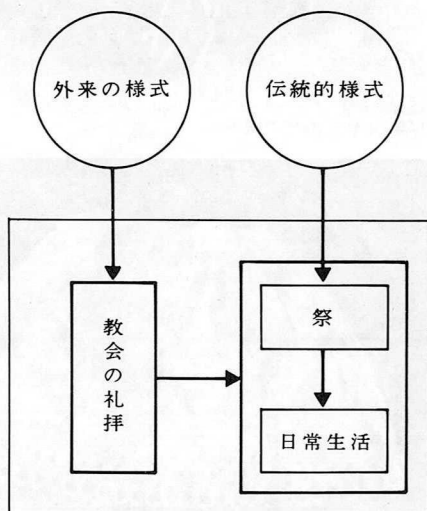


図6 衣服の様式と生活の関係

様式と伝統的様式がどのようにからみ合って形成されているかを示したものである。

外来の衣服はキリスト教の普及とともに入ってきた。したがって、教会の礼拝時の衣服は、気候風土の条件を配慮した上で、ほぼ外来の様式が踏襲されていることは納得できる問題である。

教会の礼拝が晴れの場合であれば、カマティップ（祭）も伝統的晴れの場合である。この催しには一部の階層の人が伝統的晴着を、他の人々も教会の礼拝に準じた晴着を着装する。この傾向は晴れの衣服の同一視として解釈ができる。そして祭がたけなわになれば、ヤシ油を上半身に塗る伝統的行事が行われる。祭



写真22 ヤシの葉の腰みの



写真23 ウローシュ

という晴れの様式の中で、伝統的様式と外来の様式が混在している状態がうかがえるのである。

日常生活の中では外来様式と伝統的様式の衣服のとりくみ方が質的に変化してくる。ヤシの葉の腰みの（写真22）とウローシュ（写真23）を比較してみよう。ウローシュは布地を筒形に縫い、上部にゴム紐を入れるか、紐で結びつけ、裾にレースなどの飾りをつけた簡単なものであり、形態的には外来の素材を生かした

現代の腰みではなかろうか。そして、リコーティ（腰まき）もポナペの伝統的
衣服と深いかゝわりあいをもつものと推測することができる。

それはリコーティもウローシュも、ワンピースの下着として腰につける。表
着としてはそのまゝ腰につけたり、もう1枚をバストでとめて重ね着をする。
男女とも同じ形であったり、共用したりする着装方法からである。そして、着
心地においてもポナペの気候風土にマッチした衣服として普遍化したものと考え
られる。まさに伝統という器に新しい素材を盛りつけ、融合されたものとい
えよう。

腰みのとウローシュは一見外観が異り、表面的には外来文化に浸蝕されたか
にみえるポナペの衣服の中に、ポナペ文化の伝統的遺構がつかぬかれ、ポナペ
文化の本質が生きているものと了解することができる。

7-2. 日常の衣生活の合理性と家族関係

5 節に衣服の整理と生活空間に関して記述し、大要は図5に示してある。

衣服の収納方法は晴着はコーバ（衣装箱）に、段々着古してゆくにしがたがっ
てフロシキ、段ボールの空箱から洗濯物干しそれ自体が収納機能となるものまで
移行し、収納場所も晴着から仕事着までを、イマラップ（主屋）のナンベレ
（寝室）、および、リキエンベレ（広間）、ナーシ（作業空間）の室内、および
軒下、ウォヌーン（石焼・炊事空間）の軒下と順次収納されている。また、室
内の洗濯物干しの場所もこれに準じている。

敷地内の建物はイマラップがコンクリートブロック建で、床がモルタル仕上
であるのに比べ、他は木とトタン板で建てられ、この施工材料の違いから視覚
的にイマラップの室内が一番清潔に感じられる。このような感覚だけから、衣
服の収納や物干し場所の秩序が組立てられているのかと思うと、それだけでは
ない。敷地内のそれぞれの建物は、役割が分担され（図4）、その室内での行動
に直接関係する衣服類を収納や洗濯物干し空間として利用している。つまり、

その衣服を着ての行動と、衣服の管理が合理的に密接な関係でつながれているのである。

3節の中で普段着の着方についても記述したが、同一家族の男女が相互に衣服を交換して着たり、子供が大人の衣服を借りて着たり、衣服の所有者を明確にしながらも、自由に共用されている。このような状態から性格を異にする2つの効果(図7)を考えることができる。

1つは、前述のようにそれぞれの空間要素の役割分担と人の行動、そして、その行動に適した衣服がその空間に保管されている状態と、ポナペの自然環境から1日に何回か衣服を着替える状態が相乗され、

家族成員のだれの衣服でも、手近の衣服を着るという習慣が定着した。1つの合理的思考に基くものである。

他は、ポナペ島の自給自足を中心とする厳しい生活は、家族成員の大人も子供も一体となって支えねばならない¹³⁾が、衣服の交換がスキンシップの役割として、家族の連帯感や、愛情のきずなを確め、より深くするための無意識のうちの具体的表現手段としても解釈することができる。

7-3. パターン作製の態度とその特徴

6節に手芸品に見られるパターンの傾向について記述したが、その傾向は、具象の花模様と抽象的幾何学模様とに2分される。前者は生活環境や生活習慣より、後者は伝統的な模様を受け継いだものと分類することができる。

花模様のアップリケに、作者自身がその実物も知らず、その名も知らないものが見うけられた。彼女達は服地として購入した、プリントの花柄を雛形にし

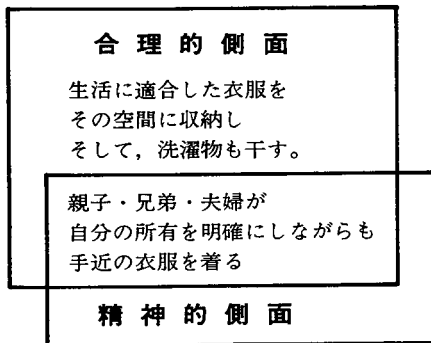


図7 普段着の着装状態

ているからである。花の実物を便化する術を知らないこともあろうが、自給自足の生活の知恵から生れたものと解釈することができる。

われわれ日本人がはじめて手芸をしようとする時、本や雑誌に掲載された手引きの見本をそのまま頂戴することが多くはなかろうか、直接的情報に恵まれすぎ、その中の既成概念の範囲内での制作に終止してしまうのが大半であると思う。したがってアイデアソースが貧困になり、同時に創造のよこびが減退するように感ずるのである。

また、われわれが花模様を画く時、一般的には、花の名前や因縁を知り、そして製作にとりかゝる。知識を優先した製作態度ではなかろうか。われわれの生活から名も知らず、由来も知らないまゝ、素直な感情表現を優先するようなかたちでのパターン製作は、幼稚園時代を境として喪失してしまっているように思えるのである。

ポナペの伝統的生活資料の多くをしめている編組品や、丸太を組立てた直線構成の家屋の表面形態は幾何学模様となるのであるが、踊り用パテリ（襦）などにみられるポナペの伝統的幾何学模様も、彼等がつくりだしたこの多くの生

活資料の、具象的表面形態のパターン化と解釈できないだろうか、それは、自然環境や生活慣習を通じての花模様の発生が創造活動の根底にある素直な感情表現によるものと推測できるとすれば、幾何学模様のモチーフを同一視したくなるのである（図8）。

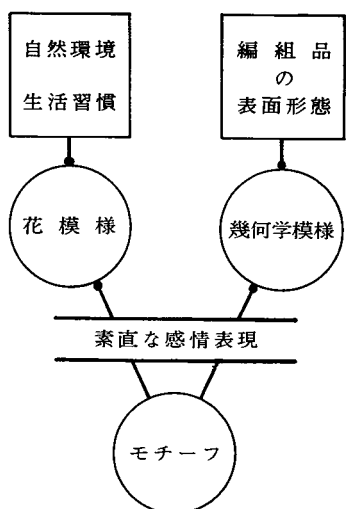


図8 パターンの発想

7-4. 新しいものに対する価値感の醸成

3節において、新しい衣服を晴着とし、段々着古してゆくにしながら普段着に移行し

てゆく過程を記述したが、このような新しいものに対する価値感の醸成の背景について、われわれの生活の仕方と比べながら記述してゆきたい。

ポナベの人々は丁度、日本の明治維新が西洋文明に憧れ、急激に摂取したように、現代の文明に憧れをいだき、財政援助による海外物資の輸入がこれに拍車をかけている。これらの生活資料の導入以前には、ポナベ島に共に生存している樹木や、その葉や実、イモ類や礁湖の魚や貝などを簡単に加工して衣・食・住に利用していたのである。

輸入された缶詰類などの保存食品や衣類、調理器具などは、彼等が伝統的に受け継いだ手づくりの生活資料に比べ、はるかに耐久性・保存性の高いものである。食料に例えるなら、伝統的なものとして、パンの実を加工し、地下に埋めて保存するマール以外は、食物を石焼きにして火を通し、ほんの数日間保存する技術しかないのである。また、彼等の自給自足の生活の仕方や、自然と人口の適度のバランスがとれた環境から、保存効率を高めたり、耐久性を高めたりすることに知恵を絞らずにすんだともいえよう。

礁湖の魚捕りも、近代的わが国の漁法に比べはるかに原始的で、われわれアマチュアが魚を釣るような立派な釣竿も必要ない。海水浴を楽しみながらの魚捕りで、仕事の中にレジャーとしてのスポーツの要素が十分満され、心身のバランスを保つことができる。そして、その日の食料以上に魚を捕ることは、無駄になるのである。

主食のパンの実とイモは、およそパンの実が4月から9月まで、イモは10月から3月までとシーズンが2分される。パンの実は木があれば自然に4月から9月の間実がみのり、イモは種類により異なるが、栽培後半年から5年の間に食べればよいのである。パンの実の季節にイモが採れないのではなく、採る必要がないのである。

こゝに例示した食料は人間がわざわざ缶詰などに加工して保存する以上に、自然が素晴らしい偉力を発揮する。魚は珊瑚礁という自然の生けすの中ですくす

くと生長し、イモもまた土の中ですくすくと育ちながら保存されており、したがって新鮮である。文明社会から生れた缶詰は、保存期間中に成長することはない。

食器類においても、伝統的なものは、例えば、パンの木の葉の食器、イモの葉の水桶、竹筒やコプラの内皮の水や酒の器、やしの葉で編んだ食物用の籠など、材料や構造からも耐久性を求めることは難しいが、その用具が必要になった時、家の近くから天然の材料を採取し、簡単に加工すればこと足りるのである。そして、使い捨てのものが大半で、長期にわたる保存は必要ではない。豊富な資源と簡単な加工で、たちどころに用具を揃えることができるからである。¹³⁾

(図9)

このような伝統的用具に、カマティップ(祭)の際、食料を持ち運ぶための籠にキヤム・キヤモロ(写真24・25)がある。その籠は常にその時、新しいヤ

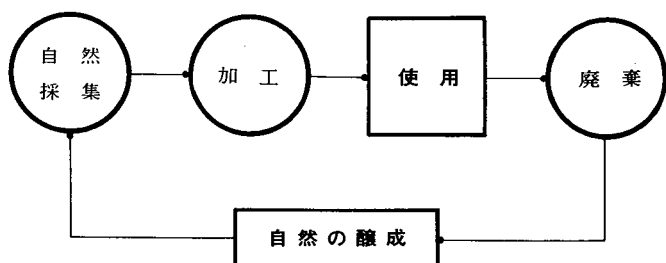


図9-1 在来生活資料の消費過程

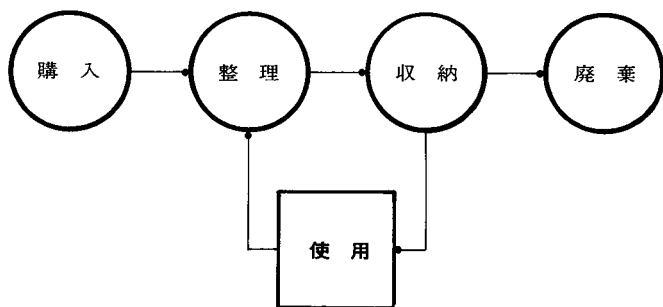


図9-2 外来生活資料の消費過程

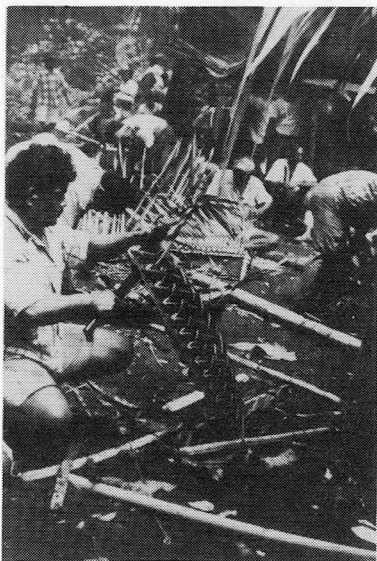


写真24 ヤシの葉で編むキヤム(簍)
—カマティップで分配された食料を持ち帰るため、その場で編んでいる—

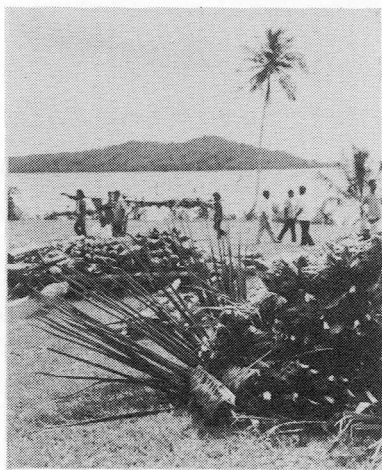


写真25 カマティップで集められたキヤム(1人で持つ簍)とキヤモロ(2人で担ぐ簍)

シの葉を採取してつくるのである。そしてこの簍は2度と絶対に使わない。

このようなボナベの伝統的生活のとりくみ方から、新しいものに対する価値を自然に認め、礼拝や祭という晴れの日と、新しい衣服、新しい生活資料との結びつきができた。新しいものに対する文化的習性によるものと考えてるのである(図10)。

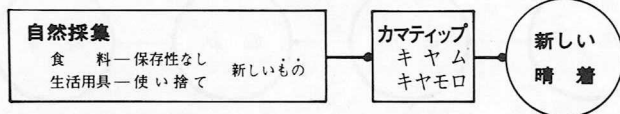


図10 価値感の醸成と生活背景

7—5. 生活空間における人とももの秩序

衣服類の収納と生活空間に関しては、5節においてその実態を、7—2項においては、外来の衣服が導入されてからの歴史が長く、一応合理的秩序が保た

れていると考察した。したがって、衣服と生活に直接関係はないが、海外から保存度の高い、耐久性の優れた物資を導入することによって、生活空間の使い方に新たな問題が生れつつあるように感じられるため、前項に関連してこの項を記述したい。

ポナベの伝統的な生活空間⁹⁾は床面がそのまま、生活平面になっており、そのため、イスやベッドに代表される家具・調度を必要としない、無家具文化と規定される日本のかつての生活空間と同じ傾向をもつものである。その空間の中で、簡単につくり、捨てることのできる生活資料とともに生活を営んでいたのである。したがって、その空間内は、ほとんど住む人自体が専有することができる空間であった。しかし、これからはポナベの人々も、外来の生活資料とともに、一つの屋根の下で共存しなければならないからである。

著しく近代化されたイマラップ（主屋）の例では、ナンペレ（寝室）の1つ1つにベッドを備え、ベッドルーム化しており、リキエンペレ（広間）には、オイル冷蔵庫、調理台、テーブルを置いた、ダイニング・キッチンコーナーと、応接セットを置いたリビングのコーナーが設けられ、わが国の最近の住宅形式に類似しているのである。したがって、ナーシ（集会所兼作業空間）やウォヌーン（石焼・炊事空間）の日常における作業空間の役割を失いつつある。

アニパス家のナーシの床下には、輸入された穀類や調味料、鍋などの調理器具や食器類の収納に物置が設けられ、ナーシの脇にイマヌクックといわれる下屋が、厨芥処理や調理器具、食器類を洗い、収納するため設けられ、ナーシの入口の片隅にも食器棚や石油コンロが置かれている。ウォヌーンが本来石焼専用の空間であったのが、火を伴う作業の場として、石積の炉が築かれ、鍋・釜の煮炊きに使われ、コブラ焼の設備であるガンショウバが置かれている(図4)。

また、アニパス家のイマラップのリキエンペレをダイニング・キッチンとリビングスペースの分割し、それぞれの部屋に家具・調度を備えようという計画も聞いている。

しかしながら、われわれの家の中が、本来の機能を満していない（使われていない）状態の生活用具類であふれ、人の生活が隅に追いやられている混乱した現状^{12, 13)}を、ポナペの将来における生活空間と推測するのは、あまりにも惨めである。このような観点から、ポナペの生活空間の機能分担の秩序が、今後どのように展開されるか、注目して観察を続けたいと思う。

おわりに

7 節の考察から、およそ以下の項に要約することができる。

- (1) 日常の衣生活において、外来文化の積極的導入の中に、伝統が生かされ、伝統の本質をみることができた。
- (2) 衣服の収納の仕方と、生活行動が合理的に設定されていること。
- (3) 日常における、親子・兄弟・夫婦間の衣服の貸し借りの着方が、家族間の情報交換を密にするための媒体となっていること。
- (4) 手芸品の創作活動が、彼等の生活体験の中から生れた素直な感情表現の結果からと推測され、創造の原点をうかがうことができた。
- (5) 生活資料に対する価値感、生活環境に対応して長年つちかわれた、生活の仕方の伝統的習性から醸成されること。
- (6) 自然環境と人口のバランスから、生活資料の廃棄から生産に至る循環系が非常にスムーズであること。
- (7) 生活空間における人のための空間、生活資料のための空間の合理的配分や、生活資料の整理・調整の在り方に対する問題提起。

以上のような結果であるが、ポナペ島の合理的で、しかも人々の和を保つ生活の知恵は、自給自足を中心とした厳しい生活の中から自然にはぐくまれた、生活環境に対する素直な対応の結果もたらされたものと考えている。そして、われわれのこれからの生活の仕方、デザインの在り方に対しても、多くの教訓が含まれている。

日本のデザイン界の一般的傾向をみると、衣服のデザイン系と、他のデザイン系のかゝわりあい非常に稀薄であることを痛感する。デザイン教育において、片や家庭科あるいは家政系で、他は美術科や芸術・工学系での教育であることに一因を求めることができるが、しかし、デザインの問題を考える時、「生活の総体から人とのもののかゝわりあいについての思考」が必要と考えている。

この主旨を他のデザイン領域の人々にも納得してもらえらば、生活の中での衣服の占める役割は重要であり、衣服の問題を除いてすべてのデザインを考えることはできない。そして、衣服のデザインも、他の生活資料や空間とのかゝわりあいにおいて展開することも重要である。

一方、生活資料に対する考え方は、人々によって当然異なるものとなろうが、高密度化した都市社会においては、ものの生産・流通・消費の立場より大別することができる。そして、日本の現状は従来まで、生産者思考を優先する社会であったことは否定できないだろう。このような状況下で今回のデザイン・サーヴェイが、同一対象を同一の空間・時間内で、千葉大学の工学系と家政系の立場、いわばものの「つくり手」と「つかい手」の双方よりアプローチすることができた。

以上の側面からも、今回の共同踏査は意義深いと考えている。

しかしながら、本報告はわずか1ヶ月足らずの野外踏査の結果を、大胆な憶測を交えた冒険によりまとめたものである。これも浅学菲才によるもので、今後、皆様方から種々ご指導を戴けたら幸甚と考えている。

今回の野外踏査の準備・調査期間を通じてご指導・ご協力いただいた千葉大学、宮崎・清水両先生をはじめ、現地で共に生活し、協力いただいた千葉大学の学生諸君、および、様々のかたちでご協力いただいた方々、そして、現地で常にあたたかくご協力いただいたボナベ島の人々に深く感謝する次第です。

文 献

- 1) 片山陽次郎：衣生活研究, **2(9・10)**, 36~40 (1976)
- 2) 同 上 : 同 上 , **3(3・4)**, 66~70 (1976)
- 3) 田口利三郎：東北帝大理学部地質学古生物学教室研究邦文報告, **24**, (1936)
- 4) Ponape Information Center: Ponape Almanac, Community Development Office, (1972)
- 5) 今西錦司編：ポナペ島一生態学的研究一, 彰考書院 (1944)
- 6) 海外漁業協力団体編：ミクロネシア地域調査報告書 (1972)
- 7) 杉浦健一：帝国学士院 (民族), **4**, (1941)
- 8) Christian F.W.: Ponape, The Cadleon Press, San Francisco, P.137~156, (1970)
- 9) 宮崎 清・清水昭俊・片山陽次郎：千葉大学工学部研究報告書, **27(52)**, 153~163 (1976)
- 10) 清水昭俊・宮崎 清・片山陽次郎：同上, **27(52)**, 165~172 (1976)
- 11) 松岡静雄：ミクロネシア民族誌, 岩波書店, P319~391 (1943)
- 12) 片山陽次郎：衣生活研究, **1(4)**, 16~22 (1974)
- 13) 同 上 : インダストリアルデザイン, **80**, 3~6 (1976)